資料館の歩みとこれから

3つの資料館の閉館

市内にある高島歴史民俗資料館・朽木資料館・マキノ資料館の3館は、各施設の老朽化などによる統廃合によって、3月31日㊐に閉館します。

高島歴史民俗資料館は、昭和56年に旧高島町鴨に開館し、鴨稲荷山古墳を始めとした市内の史跡や考古資料および大溝藩関係資料の展示保存等を行ってきました。高島市発足後は、3つの資料館の統括館として、専門知識を持つ学芸員を配置し、来館者への案内や市内の歴史情報の発信等を行ってきました。

朽木資料館は、昭和57年に旧朽木村野尻に開館し、木地師道具等の朽木地域関係資料および移築民家と民具を展示してきました。朽木陣屋跡に所在し、朽木の歴史学習・見学の拠点として利用されてきました。

マキノ資料館は、平成5年に旧マキノ町蛭口に開館し、マキノ地域の民俗・歴史資料を中心に展示を行うなど、人々の暮らしのようすが、再現された古民家のジオラマと共に学べる施設でした。

いずれの資料館も各地域の郷土学習で利用されるなど、長きにわたり高島市の歴史文化を紹介する施設としての役割を担ってきました。

中江藤樹記念館の改修

これまで3つの資料館が担ってきた役割は、これから改修工事が予定されている近江聖人中江藤樹記念館に引き継いでいく計画です。中江藤樹記念館は、中江藤樹に関連する資料の収集、保管を担うほか、中江藤樹やその研究を中心とした展示を行うなど、その教えの普及啓発に努めてきました。

中江藤樹記念館の外観

今回の改修で中江藤樹記念館には、これまで3つの資料館が担ってきた市内の歴史文化を紹介する機能が新たに加わります。改修工事では、展示スペースが増築されるほか、デジタルサイネージや映像コンテンツによる展示等が計画されるなど、高島市の歴史文化を展示紹介する中核施設としてのリニューアルを予定しています。

リニューアル開館に向けて

中江藤樹記念館は、予定されている改修工事に伴い令和6年度中は休館する計画です。3つの資料館の閉館と併せ利用者の皆さんには、今回の統廃合によってご迷惑をお掛けすることとなります。リニューアル予定の新施設は、高島の歴史文化と共に改めて中江藤樹を知っていただくことができる施設であり、中江藤樹が生まれその教えが育まれた、高島の歴史文化や風土について学ぶことができる、展示施設として新たなスタートが期待されます。

問 文化財課 ☎(25)8559

マキノ資料館・朽木資料館の特別開館

見学に際し、事前予約が必要であったマキノ資料館と朽木資料館について、次の日時に特別開館します。

見学いただける最後の機会です。高島歴史民俗資料館の見学と併せてご利用ください。

特別開館 3月28日㊍～30日㊏(予約不要)
開館時間 9時～16時30分

編集雑感

今月号の特集2はご覧になりましたか？

写真撮影のために2か所カフェにお邪魔しましたが、2か所とも、お店の雰囲気が良くて、ついつい写真を撮りすぎてしまいました。市内には、居心地が良くて映えるカフェが沢山あるようです。見つけたら「#たかP写真館」を付けて、インスタグラムに投稿して教えてくださいね♪（Y）

広報たかしま 令和6年3月号 No.290
発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000㈹
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。

絅斎書院100周年

絅斎書院の建設

新旭町太田出身の儒学者である浅見絅斎の教えを伝える絅斎書院は、大正11年(1922)に発足した「絅斎先生遺徳顕彰会」らの働きかけによって、大田神社参道西側に建設が進められ、2年後の大正13年4月13日に落成式が挙行されました。建物は、現存するとおり木造平屋建て、入母屋造り、桟瓦葺き、桁行5間の平入で、正面に切妻の玄関が付加されています。建設費用には旧高島郡町村の拠金のほか、一般有志からの寄付金が充てられました。

絅斎書院

絅斎の学問

浅見絅斎は、名を安正、字名を重次郎、号を絅斎といい、若い頃は高島順良とも名乗っていました。承応元年(1652)8月13日に太田村の浅見道斎の次男に生まれ、幼い頃から大志を抱き、学問を好んだので、父が兄の道哲と共に医学を学ばせたと伝わります。25歳頃、京の儒学者・山崎闇斎に師事し、厳しい指導のもとで学問に励み、闇斎門下を代表する弟子の一人に数えられるようになりました。また自らも京の自宅に錦陌講堂(きんぱくこうどう)を開き、門弟を育てると共に、30歳頃からは本格的に著述を始め、最終的には100点を超える著作を残しました。中でも中国の忠臣八義士の略伝や遺言を取り上げた『靖献遺言(せいけんいげん)』は、頼山陽、梅田雲浜などの儒学者や吉田松陰、橋本左内ら幕末の志士たちにも大きな影響を与えました。

絅斎の学問は、師である山崎闇斎の朱子学至上主義や垂加神道の考え方を踏まえた上で、自らの道徳的理念に基づき朱子学的合理主義を徹底したもので、絅斎はその教えを多くの書に編著する中で、学者として広く認められるようになっていきました。

絅斎書院保存会の設立へ

没後200年にあたる明治43年(1911)、絅斎に従四位が贈られ、翌年4月13日には太田の区長事務所内に置かれた太田望楠書院において二百年祭並びに贈位奉告祭が行われました。その後は毎年4月13日に例祭が行われるようになり、前述のとおり大正13年(1924)には絅斎書院が建設され、以降はこの場所で例祭が行われるとともに、絅斎の遺品を保管し、教えを伝える場所として、地域有志の皆さんに守られ続けてきました。

昭和52年(1977)には、地域住民らを会員とする「絅斎書院保存会」が発足しました。現在も保存会の事業として4月13日の祭典、書院の整備、京都鳥辺山の絅斎墓所の墓参などが続けられています。

絅斎書院保存会ホームページ

問 文化財課 ☎(25)8559

編集雑感

出会いや別れの季節となる時期がやってきました。この春から新しい環境になる方も多くおられると思います。高島市は市制20周年を来年の1月に迎えることになり、今回の4月号から市制20周年の冠が付いたイベントがいくつか登場してきます。今後もさまざまな20周年関係のイベントが予定されていますので、ぜひ参加していただき、一緒に高島市を盛り上げていきましょう！(K)

広報たかしま 令和6年4月号 No.291
発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。

広報たかしま
令和6年 9月号 No.296

ペリー来航と関藍梁

日本開国170周年

今から170年前の安政元年(1854)、日米和親条約が締結され、200年以上続いた徳川幕府の鎖国政策が終わりを迎えました。ここから日本は、世界に向けて新たなスタートを踏み出します。日本の歴史が大きく動いた出来事の、まさにその現場に、高島出身の人物が立ち会っていました。儒学者の関藍梁(せきらんりょう)(1805～1862)その人です。

関藍梁書「龍井堂」扁額(膳所歴史資料室所蔵)

関藍梁

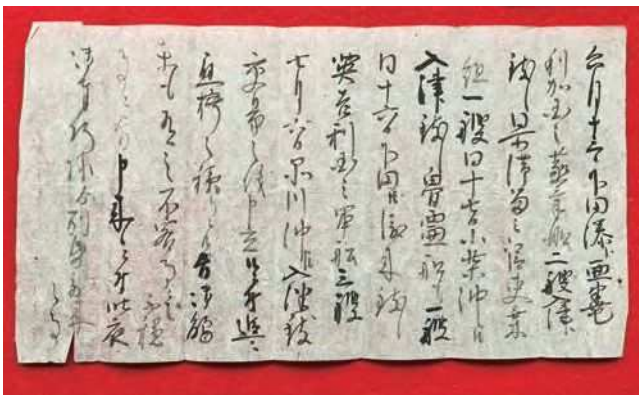
藍梁は東万木村(現・安曇川町青柳)の庄屋、関八右衛門宗順の子として生まれました。幼い頃から書の才能に優れ、家族にすすめられて、若くして江戸へ行き学問に励みました。

13歳の頃、師事していた薩摩藩の儒学者・石塚志堅が亡くなり、藍梁は縁あって幕府の最高学府・昌平坂学問所(しょうへいざか)の第8代大学頭である林述斎(じゅっさい)に仕えることになりました。その後、昌平坂学問所に入学してますます学問に励み、卓越した詩や書の能力に加え、温厚で優しく、おごり高ぶることのない人柄もあり、周囲から厚い信頼を寄せられて、3代に渡る林家歴代の大学頭に仕えました。

ペリーの来航

そんな中、嘉永6年(1853)浦賀沖(現・神奈川県横須賀市)にペリー率いるアメリカ東インド艦隊(黒船)が来航し、日本に開国を求めました。翌年改めて訪日すると告げたペリー一行に対応するため、幕府は横浜に応接所を開設し、第11代大学頭・林復斎を筆頭に、日本代表の交渉団を編成しました。この時、藍梁も復斎の書記役として同行したのです。

米国との交渉が行われる中で、藍梁は米国側の通訳を務める中国人の羅森(らしん)と漢詩の唱和をしたり、ペリーたちの姿や応接のようすを絵に描いて記録したりしていました。また、膳所藩士でもあった藍梁が偶然持参していた膳所茶をペリーが気に入り、藍梁の進言で、膳所藩では国産輸出品として大々的に茶園が開拓されたことが分かっています。


ペリー来航を知らせる書簡(個人蔵)

故郷高島と中江藤樹

藍梁が生涯にわたって詠んだ数多くの詩の中に、故郷高島における儒学の先覚者・中江藤樹へ想いを馳せたものが残されています。藍梁が学んだ昌平坂学問所の教授・佐藤一斎が、藤樹書院を訪れた際に詠んだ七言律詩を受けての一首です。

人生の大半を江戸で過ごした藍梁ですが、その胸中には、絶えず故郷への想いがあったことでしょう。

問 文化財課 ☎(25)8559

編集雑感

7月20日の湖西線開通50周年のイベントで、初めて出会った人同士が湖西線やお子さんのことをお話されていた光景がとても印象的でした。地域のイベントは地域を盛り上げ、人をつなぐことができるということを改めて感じました。今年度は市制20周年記念としてもさまざまなイベントが開催されています。少しでも気になったイベントには足を運んでいただけるとうれしいです。(M)

発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。

『高島郡誌』記載の旧跡

『高島郡誌』の刊行

昭和2年(1927)に高島郡教育会の編集によって刊行された『高島郡誌』は、明治37年(1904)に郡が定めた郷土史編纂規程に基づき、郡内各町村の小学校で作成した郷土誌を集め、そこに新たに収集した資料等を加えて編集されたものでした。内容は、「第一編　地誌」が地勢や気象、町村の概要、寺社、名所・旧跡、人物、風俗について、「第二編　沿革」が古代から近世までの通史、民政、教育、産業、山林、水利、交通、災異について、「第三編　郡治」が当時の郡治組織、議会、財政議会、財政等について、と多岐にわたっています。

北仰の旧跡

その『高島郡誌』の旧跡の項には、川上村大字北仰(現在の今津町北仰)に「角家足宅址」があることが紹介されています。その説明文は

「地は方形にして約四百余坪あり。口碑に云、天平宝字八年藤原仲麻呂が近江に敗走したりし時の高島郡の前少領角家足の旧宅跡なりと。」

となっていて、郡誌編さん時には、北仰の地に角家足という人物の屋敷があったと伝わっていたことが分かります。

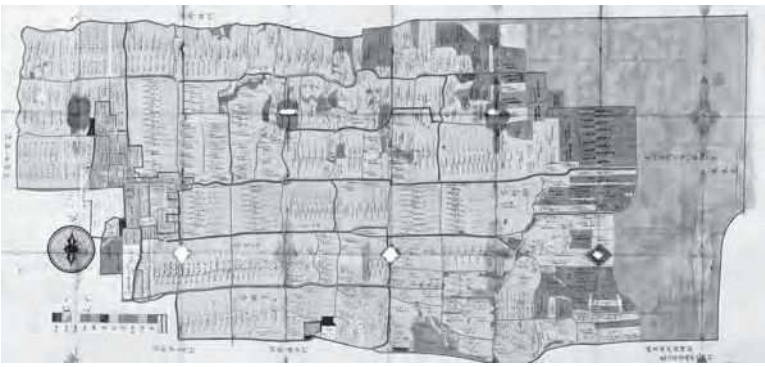
この記載に登場する藤原仲麻呂は、大化の改新で有名な藤原鎌足のひ孫にあたる人物で、聖武天皇や叔母にあたる光明皇后から信任を得て権勢を誇りました。しかし、光明皇后の死後、朝廷での権力が衰え始めた仲麻呂はクーデターを起こそうとしますが失敗し、領地を持っていた近江国高島郡に逃げ道を求めました。

その際、仲麻呂を助けて屋敷に泊めたのが前少領角家足で、このことは日本の正史である『続日本紀』にも記されています。少領というのは、郡内の政務を行う官吏で、地元の有力な豪族が任じられることが多かったとされます。角家足も高島郡北部に勢力を持っていた豪族だと思われ、角氏の名前は、現在も北仰に残る津野神社や角川の津野神社に通じるものと考えられています。

伝承地の紹介

しかし、実際のところ『高島郡誌』や『続日本紀』の記載だけでは、角家足宅址の位置を限定することはできていません。現在、地元には集落の東側に「古屋敷」と呼ばれる場所があり、北仰に最初に住み着いた人々が住んだ地域だと伝えられています。一説にはこの「古屋敷」が角家足宅址だともいわれており、『高島郡誌』ではこうした伝承を踏まえて、旧跡の紹介を行ったものと考えられます。

問 文化財課
☎(25)8559



北仰村地券取調総絵図

編集雑感

「大人になると1年は新幹線並みのはやさで過ぎていく」という、スポ少のコーチの言葉をこの時期になると思い出します。大人になると言葉のとおり、知らない間に1年が過ぎていて、その原因は打ち込める何かがないからかなと最近思うようになりました。来年は、何か好きなことや頑張ろうと思えることを早めに見つけて「今年は充実した1年だったな」と言えるようになりたいと思います。(M)

広報たかしま 令和6年12月号 No.299
発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

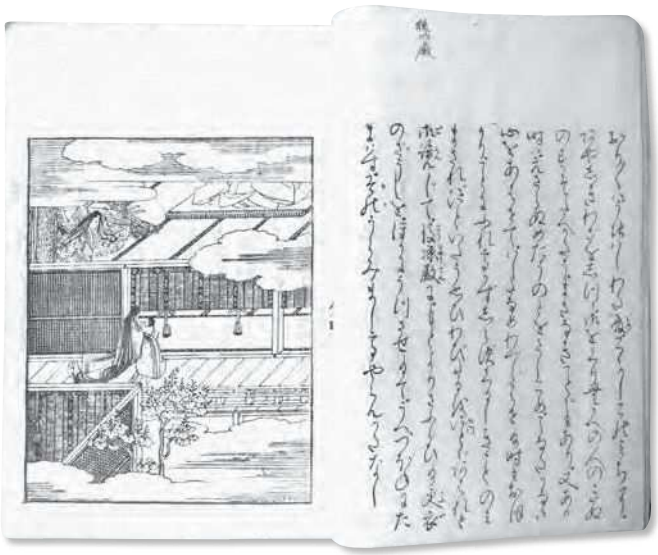
R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。

源氏物語と江戸時代の書籍出版

『絵入源氏物語』と山本春正

日本古典文学の金字塔として知られる『源氏物語』が、広く一般大衆に読まれるようになったのは、江戸時代のことです。

市内在住の方の家に伝わった『承応版源氏物語』は、通称『絵入源氏物語』と呼ばれる江戸時代初期の版本（木版で刷られた本）です。本編54巻と、付録の解説書を加えた全60巻がそろうのは、国内でも珍しいと言われています。江戸時代初期屈指の蒔絵師として知られ、歌人でもあった山本春正（1610～1682）の編集で、慶安3年（1650）に初版が刊行されました。初心者でも読みやすいように、本文に初めて注釈や読点、濁点、振り仮名が加えられ、合計226枚の挿絵が添えられています。



『承応版源氏物語』第一巻「桐壺」より（高島市所蔵）

本書の登場で、それまで一般的に梗概書（ダイジェスト版）で読まれていた『源氏物語』を、多くの人が全編を通して楽しむことができるようになりました。

書籍出版の歴史

それまで日本での書籍出版は、主に寺院や為政者・権力者とその周辺で行われていました。江戸時代初頭の寛永年間（1624～1644）に京都で商業目的の民間出版がさかんになり、出版・印刷・販売を一手に扱う「書肆（本屋）」が確立すると、大坂・江戸へ市場が拡大しました。また大量印刷が容易な木版による版本の出版が主流となり、本屋を通じてさまざまなジャンルの書籍が流通し、書籍出版は文化的経済活動の一大産業として隆盛を極めました。

正保４年刊本『鑑草』（藤樹書院所蔵）

本屋と中江藤樹

本屋にまつわるエピソードとして、高島出身の儒学者・中江藤樹の逸話が残されています。ある日、執筆中の著作『翁問答』の内容が流出し、京都の本屋が無断出版しようとしているのを知った藤樹は、それを引き留めました。このままでは大きな損害になってしまうという本屋の訴えに、藤樹は『鑑草』の原稿を別途執筆して与え、正保４年（1647）に版本が刊行されたと伝わっています。

問 文化財課 ☎（25）8559

編集雑感

今号の表紙と特集１は「二十歳のつどい」です。私は会場で写真撮影をしていましたが、多くの笑顔や晴れやかな姿に元気をいただいた気がします。今年の二十歳の皆さんは高島市と同じ年。というご縁から、実行委員の方々には１月号の市制20周年特集でもご協力いただき、個人的に非常に思い入れのあるつどいとなりました。二十歳の皆さん、改めておめでとうございます。これからの人生に幸あれ！（S）

広報たかしま 令和７年 ２月号 No.301
発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

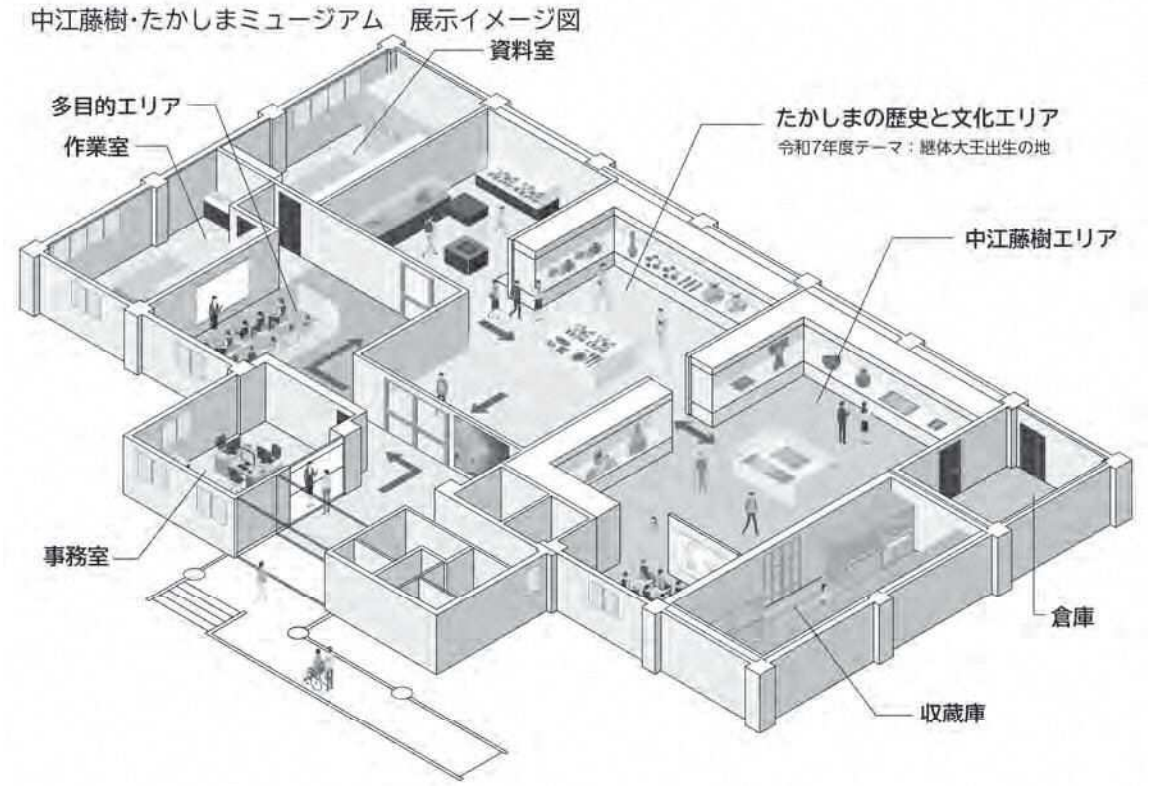
R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。

広報たかしま
令和7年 4月号 No.303

新施設の名称が決まりました！！

中江藤樹・たかしまミュージアムのロゴマークを発表！
高島を象徴する市章に中江藤樹にちなんだ藤の花をあしらいました。
これから花開くであろう花房のつぼみは、高島の未来です。
水面は高島の水文化と、過去・現在・未来の時間の流れをあらわしています。

中江藤樹・たかしまミュージアム
NAKAE TOJU TAKASHIMA MUSEUM



新施設、始動！

長年にわたって地域の特色ある展示を行い、市民に親しまれてきた高島歴史民俗資料館、朽木資料館、マキノ資料館の3館が、それぞれの役目を終え、令和6年3月にその歴史に幕を下ろしました。そして令和7年、これら3つの資料館が収蔵していた貴重な文化財は、今後の確実な継承のために集約され、次の活躍の場で、より一層その価値と魅力を発信していくことになります。

新名称「中江藤樹・たかしまミュージアム」

令和7年6月に新たな発信・展示の中核施設として生まれ変わる近江聖人中江藤樹記念館の新名称が、「中江藤樹・たかしまミュージアム」に決まりました。

このミュージアムでは、従来の中江藤樹に関する資料に加え、3つの資料館から受け継いだ、埋蔵文化財や古文書をはじめとする貴重な「実物資料」、「映像資料」および「模型（レプリカ）」等を組み合わせ、より分かりやすい解説で、これらを展示・紹介していきます。また、常設展示は行わず、展示品は一部を除いて、1年ごとに入れ替えまたは更新を行い、「いつ来ても新発見！」ができる施設となるよう企画しています。

古代から現代にわたり、広く高島で育まれた、多彩な歴史と豊かな文化を網羅すべく、中江藤樹・たかしまミュージアムは、「たかしまの歴史がすべてわかる！」ミュージアムを目指します。

問 文化財課 ☎（25）8559

編集雑感

今年は国勢調査が行われる年です！国勢調査は日本に住んでいるすべての人と世帯を対象とする調査で、５年ごとに実施されています。９月～10月にかけて調査員が各ご家庭を順次訪問しますので、調査にご協力をお願いします。現在市では、国勢調査の調査員を募集しています。32ページをご確認いただき、少しでも興味関心がある方はお気軽に企画広報課にご連絡ください。応募をお待ちしています！（M）

発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740(25)8000(代)
https://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。